

目 次

序	i
---------	---

第 1 章 動詞類型とアスペクト限定	1
--------------------------	---

1. はじめに	1
2. 動詞分類	3
3. 奥田分類の先にあるもの	7
4. 工藤の動詞分類	10
5. 動詞類型の変換	12
6. アスペクト限定	13
7. 項限定詞と付加限定詞	16
8. 瞬間動詞の認定	19
9. (非) 限界性の認定基準	22
10. 開始時点	25
補説	27

第 2 章 心理動詞構文	33
--------------------	----

1. はじめに	33
2. ES 型心理動詞	34
3. ES 型心理動詞の非限界性	36
4. 自動詞と他動詞	40
5. 格の交替	44
6. 原因の「に」と「で」	47
7. 「る」形が示す現在の事態	49

8. アスペクチュアルな特質.....	53
9. EO 型心理動詞と逆行束縛.....	56
10. 結語にかえて.....	62
補説.....	62
第3章 数量詞連結構文.....	69
1. はじめに.....	69
2. 1970 年代の分析.....	71
3. 相互 c 統御条件.....	73
4. 名詞句数量詞と動詞句数量詞.....	78
5. 機能論的分析.....	85
6. 語用論的分析.....	87
7. 動詞の意味類型.....	89
8. 「結果」の含意とアスペクト限定.....	92
9. 結果を含意する項.....	95
10. 文脈的アスペクト限定.....	97
11. 「ている」文.....	100
12. 状態性述語.....	101
補説.....	103
第4章 移動動詞構文.....	113
1. はじめに.....	113
2. 限界性.....	114
3. 方向の「に」.....	118
4. 方向と存在.....	121
5. その他の構文における「に」.....	124
6. 「まで」句.....	126
補説.....	128

第5章 結果構文	133
1. はじめに	133
2. 日本語の結果述語	135
3. 直接目的語の制限	137
4. アスペクト制約	139
5. PP型結果構文におけるアスペクト制約	141
6. AP型結果構文	143
7. 極点制限	145
8. 結果構文の本務	149
9. 位置変化動詞の結果構文	151
10. 結果構文の細分化	155
11. 疑似結果構文	156
12. 結果構文の拡張	160
13. 類型論的差異	163
補説	167
 第6章 いわゆるナ形容詞の結果述語	 177
1. はじめに	177
2. 活用範疇説と非活用範疇説	178
3. ANにおける「な」と「の」	182
4. ANの結果述語	185
5. 名詞と程度性	190
6. 「な」と「の」の統語構造	194
補説	196
 第7章 二重目的語構文	 199
1. はじめに	199
2. 動詞句内の語順	201
3. 動詞句の構造	204
4. 所有の含意	211

5. 間接目的語の項性.....	215
6. NP か PP か	221
7. 与格所有者.....	222
8. 動詞類型.....	223
9. 開始時点.....	227
10. 動詞の（非）限界性.....	229
補説.....	231
 第8章 「ている」文.....	 241
1. はじめに.....	241
2. 動作持続と結果持続	242
3. 効力持続.....	245
4. 第四種動詞構文.....	246
5. 単純状態の「なっている」.....	252
6. 「青い目をしている」構文.....	253
7. 虚構移動構文	255
8. 日本語の複合動詞.....	256
9. 「ている」文の統語構造.....	259
10. イディオム解釈	260
11. 効力持続構文の統語構造	262
補説.....	264
 索引.....	 269

第1章

動詞類型とアスペクト限定

1. はじめに

動詞は、文構造の骨格を決める重要な品詞で、文法研究にとって礎の一つとなるものである。他の品詞でもそうだが、動詞の場合は特に、綿密な方法での動詞分類が基礎作業となる。動詞分類の視座には様々なものがあり得るが、本書では、アスペクトの観点による動詞分類を基盤とすることにした。

文には、テンス（時制）、アスペクト（相）、時副詞など、時間に関する表現が含まれる。このうち特にテンスは、文が成立するための必須要素であるが、日本語のテンスは非過去形（「る」形）と過去形（「た」形）が基本形式である。例えば、文内容が過去のことである場合には、動詞のテンスを過去形にし、必要であれば「昨日」などの時副詞を用いて、「昨日、映画に行った」などと言う。

一方、(1a)の進行形の「ている」や、(1b)の完了形「てしまう」などはアスペクトを表す形式である。

- (1) a. 太郎が運動場を走っていた。
b. その本はもう読んでしまった。

(1a)は、走るという行為が過去のある時点において進行していたことを示している。他方(1b)は、本を読むという行為が、過去のある時点以前に完了したことを表している。

このようにテンスとアスペクトは、共に時間に関わる表現なのであるが、

第2章

心理動詞構文

1. はじめに

まず、心理動詞の研究状況を俯瞰することから始めよう。本章では、生成文法における伝統に準拠し「心理動詞 (experiencer verb)」という名称を用いるが (psych(ological) verb とも言う)、日本語学では感情動詞 (山岡 1998, 2000)、内的情態動詞 (工藤 1995) などと呼ばれることもある。もっとも、上記論考においてそれらの名称で括られている動詞類型には、「思う」などの思考動詞や、「見る」などの知覚動詞も含まれるので、本章よりも広い動詞群を含むということは言えよう。また、山岡 (1998, 2000) は感情動詞を3区分し、さらにそれらを下位区分しているが、本章での心理動詞は、山岡の情意という下位区分に相当すると思われる。なお、英語においても、心理動詞を幾分か広義に捉える論考に Levin (1993) がある。

心理動詞構文とは、何らかの感情を抱く「経験者 (Experiencer)」と、その感情を引き起こす「原因 (Cause)」を含む構文である。この構文に (1a, b) の2区分があることはよく知られている。

- (1) a. この子が雷を怖がる。
- b. 雷がこの子を怖がらせる。

(1a) は経験者「この子」が主語に立つ類型であり、(1b) は経験者が目的語になる類型である。他方、原因「雷」は、(1a) では目的語位置に、(1b) では主語位置にくる。以下、(1a) タイプを「ES (experiencer-subject) 型」、(1b) タイプを「EO (experiencer-object) 型」と呼ぶ。

第 3 章

数量詞連結構文

1. はじめに

数詞に類別詞の「人」や「冊」などが付いた「3 人」「5 冊」といった数量表現（以下、「数量詞」と呼ぶ）は、本来的には「3 人の学生」「5 冊の本」のように、「の」を伴って名詞を修飾し、全体として名詞句を作るものであるが、(1) のように名詞から離れた位置に生起することもできる。

- (1) a. 学生が研究室に 3 人来た。
- b. 本を紀伊國屋で 5 冊買った。

通常、(1a, b) のような文を「数量詞遊離構文 (quantifier floating construction)」と称し、名詞から離れた位置に生起する数量詞を「遊離数量詞 (floating quantifier)」と呼ぶのが慣例である。また、数量詞によって数が数えられている名詞 ((1a, b) での「学生」「本」など) を「先行詞 (antecedent)」と呼ぶ。

数量詞遊離構文という名称から分かるように、かつては、「3 人の学生」などを基底形とし、ここから数量詞を「遊離」して「学生が 3 人」などを生成していた。しかし、現行の理論的枠組みでは、数量詞遊離という操作を廃し、数量詞を、それが現れている位置に基底生成するのがむしろ標準的な分析である。例えば (1a, b) の「3 人」「5 冊」などは、副詞として最初からこの位置に基底生成するのである（かつてとは別の方法で遊離させる分析もあるが、これについては[補説 1]を見られたい）。古典的研究の中で唯一の例外は奥津 (1969) で、奥津はこれ以降の研究でも、一貫して「学生 3 人が」「本 3 冊を」のような基底形を設定し、ここから数量詞を遊離させる

第4章

移動動詞構文

1. はじめに

本章では、主語が移動を行う、(1)のような「移動動詞構文」を分析の対象とする。

- (1) a. 太郎は美術館に行った。
b. 花子はバスに乗った。
c. 先生が大阪に引っ越した。

ここにおいて、下線で示した「に」は移動の着点を表すとされており、実際、「美術館」「バス」「大阪」は、それぞれ「行く」「乗る」「引っ越す」という移動動詞が表す動作の着点である。これらの文は、英語では to もしくは into を用いて、(2)のように表すことができる。

- (2) a. John went to the museum.
b. Mary got into the bus.
c. The teacher moved to Osaka.

すなわち、移動動詞構文における英語の (in)to は、日本語の「に」に対応し、共に着点を表すということになる。

しかし、(3)のような文では、英語では (in)to を用いることができるのに対し、日本語では「に」の落ち着きが悪い。容認性を向上させるためには、例えば (3b) の括弧内に示したように、「歩いて入る」のように複合動詞にするか、(3d) のように「まで」を用いるなどの方策を取る必要があるだろう。

第5章

結果構文

1. はじめに

結果構文 (resultative construction) は、伝統文法の時代においても、例えば Jespersen (1909–1949) に記述が見られる。しかし、この構文が示す複雑な様相の解明は 1960 年代まで持ち越され、Halliday (1967) による “resultative attribute” (下で説明する結果述語とほぼ同じ) の分析を待たねばならなかった。その後、McCawley (1971), Green (1972, 1973) の論考を経て、Randall (1982) や Simpson (1983) において初めて、体系的な分析が試みられるようになる。これらの論考は英語を対象言語とするものだが、日本語の結果構文の姿を的確に捉えるためには、日本語のみならず英語の文例も検討するのが非常に有益である。本書の他の章でも英語の文例をかなり入れているが、本章では、それ以上に英語例を加えたことを予めお伝えしておきたい。

(1a, b) は、学校文法では、SVOC の第 5 文型として教えられるもの (の 1 つ) である。これらは、(1c, d) のように日本語でも可能であるが、[] で示す統語範疇名については第 2 節で議論するので、ここでは範疇名を付けずに示す。

- (1) a. John painted the house [_{AP} pale blue].
- b. Mary broke the vase [_{PP} into pieces].
- c. ヒロシは愛車を[赤く]塗った。
- d. 料理長はうどん粉を[平らに]のばした。

第6章

いわゆるナ形容詞の結果述語

1. はじめに

本章では、前章との関連で、ナ形容詞が結果構文の結果述語となる構文を扱う。が、そのことを論じるためには、ナ形容詞に関する幾つかの事項を確認する必要がある。

かつて形容動詞と呼ばれていた「きれいな」「静かな」などは、「美しい」「やさしい」などのイ形容詞と並行的に、ナ形容詞と称されることが多い。ナ形容詞は、イ形容詞と同様に、名詞を修飾する機能を持っている。名詞も、後続する名詞を修飾することができるが、(1a)のように名詞(「本」)を修飾する形が「な」となるものをナ形容詞とし、(1b)の「の」となる名詞と区別するのが通例であった。

- (1) a. きれい {な / *の} 本
- b. 言語学 {の / *な} 本

しかしながら、名詞修飾形が「な」で終わるものの中にも、(2a, b)のように「な」と「の」の交替(これを「な / の交替」と言う)を許すものがある一方で、(3a)のように「の」が言えないものがある。また、(3b)のように名詞修飾形が「の」となるものの、名詞なのかナ形容詞なのか判断に迷うものもある。

- (2) a. 僅か {な / の} お金
- b. 懸命 {な / の} 努力

第 7 章

二重目的語構文

1. はじめに

二重目的語構文 (double object construction) とは、目的語を 1 つのみ有する通常の他動詞構文とは異なり、間接目的語と直接目的語という 2 つの目的語を持つ構文である。日本語では (1) が典型的な二重目的語構文で、「花子に」が間接目的語、「ダイヤの指輪を」が直接目的語である。

(1) 太郎が花子にダイヤの指輪をあげた。

他方、英語では (2a) が二重目的語構文であるが、(2a) は意味をほぼ変えずに (2b) で言い換えることができる。

- (2) a. John gave Mary a diamond ring.
b. John gave a diamond ring to Mary.

(2a) での間接目的語 Mary が、(2b) では to Mary となっている。

英語の二重目的語構文には、(2a) のタイプの他に (3a) があり、(3a) もほぼ意味を変えずに (3b) で言い換えることができる。

- (3) a. John found Mary a good job.
b. John found a good job for Mary.

本書では、Mary が間接目的語となる (2a) (3a) を「二重目的語パターン」と呼び、Mary が to / for を伴って前置詞句となる (2b) (3b) を「PP パターン」と称する。また、間接目的語が直接目的語の受け取り手となる (2) を

第 8 章

「ている」文

1. はじめに

動詞のテ形（「食べて」など）に形式動詞の「いる」が付いた、「食べている」などの形を「ている」形と言う。「ている」には多くの用法があるが、(1a) の動作持続（動作の継続）、及び (1b) の結果持続（結果の残存）の意味で用いられるのが基本であると思われる。動作持続は、英語の進行形（動詞 + -ing）に相当するもので、ある観察時点において進行している動作を表す。それに対して結果持続は、動作・作用はそれ以前に終了しているのであるが、その変化結果が観察時点に残っていることを表すものである。「ている」は、その他にも、(1c-i) で列挙する様々な意味を表す文に現れる汎用形式である。括弧内に示した用法の名称については、そのタイプを扱う際に順次説明する。

- (1) a. 太郎が走っている。(動作持続)
- b. 電灯が消えている。(結果持続)
- c. 私は健康のため、毎朝、公園を走っています。(習慣)
- d. シェイクスピアは多くの歴史劇を書いている。(効力持続＝パーフェクト)
- e. その人なら、昭和 33 年 9 月 1 日に他県に転出しています。(記録用法)
- f. 拓也はおじいさんに似ている。(第四種動詞構文)
- g. 屋内はすべてバリアフリーになっています。(単純状態の「なって